

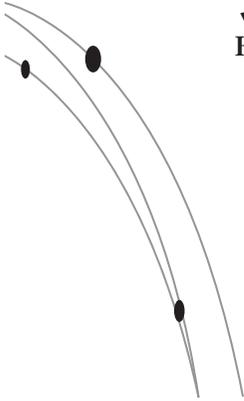
連載

フィールド・アイ Field Eye

広州から——③

暨南大学 丸山 士行

Shiko Maruyama



中国で働く

新しい勤務先となった暨南大学・経済与社会研究院 (IESR) だが、研究環境はとても気に入っている。まず中国のミクロ実証の一大拠点ということで自分としては居心地が良い。トップ大学ではないので、総合的な研究レベルでは日本の一流経済学部には及ばない。なにせ自分などが最もシニアの1人なのだ。ただこれは見方を変えると若手が多いということで、とにかく活気がある。ファカルティの大多数は欧米の一流大学の PhD 取得者だ。テニュア制度が導入されていて、ジャーナルのランキングリストが制度化されている。テニュア審査は海外の専門家も入れて行う本格的なもので、うまくいかず去って行く若手もいるが、みんな精力的に論文を書いて投稿する文化が染みついている。セミナーも彼らがネットワークを使って一流大学の研究者を呼んでくるので充実している。また、IESR とは別に経済学部も同じ建物内にあり、そちらも海外 PhD 持ちでやる気満々の若手を毎年どんどん採用している。そんな中で自分が数少ないシニアの1人なのだ。このあたりは好き嫌いもあろうが、自分はこの今までと全く違う立ち位置を楽しんでいる。関心テーマが近い若手に声をかけて勉強会をやったり、ちょっとした研究室のようなものを立ちあげたりしている。オーストラリアではできなかった経験だ。

女性の進出は日本より進んでいる。このあたりは共産主義のレガシーもあるようだ。政界でこそ女性は非常に少ないが、大学内では女性のリーダーも多く、うちの教授陣でも若手は女性が男性より多いくらいだ。同じ東洋人女性がこうして研究職で大勢、元気に活躍

しているのを見ると、日本との差を感じさせられる。ちなみに *China Economic Review* と *Japanese Economic Review*、日中両国経済学会の学術誌であるが、編集委員に占める女性の割合を確認してみたところ CER は 50%、JER は 4% であった。

シドニーから来て有り難かったことの1つが研究費だ。オーストラリアでは国のグラントをとるのが非常に難しかった。若い頃にそれなりのものを1つ取れたのだが、その後は毎年挑戦するも1つも取れなかった。もちろん立派に取れている日本人も少なくないので、このあたりは分野特有の事情や所属機関の要因などいろいろあったようだが、とにかく自分には難しかった。一転、中国に来て国の研究助成に応募したところ1回目あたり、2年間で80万円(約1600万円)頂けることになった。しかも大学の規定により、国家グラントを取った教授にはポストクの資金をくれるという。見よう見まねで募集してみたところ、日本の東北大で博士を終えた中国人の若手が来てくれることになった。日本の文系でポストクを雇うことは難しいと聞かすが、オーストラリアでも類似の制度はあった。競争的資金を取ってきた教員に大学がポストクのお金をつけてくれて、それを梃子にさらに業績を伸ばせる、資金獲得のインセンティブも上がり、若手も育つ、となかなかよくできた仕組みなのだが、なぜ日本の大学がそれをやらないのかわからない。

良いことばかりでもない。最も落胆したのは今まで使ってきたデンマークの行政データが使えなくなったことだ。北欧の行政データは全国民をカバーする全数データで、センサスや税関係にとどまらず教育・医療・犯罪などが接合できる研究者垂涎のデータである。今は一橋大学にいらっしゃる今井晋先生にご紹介頂いたのがきっかけで、コペンハーゲンにある非営利の研究所を通じ、行政データを使って論文を書いてきて、これからも書くつもりだったのだが、中国移籍が決まった後、データ利用許可を停止するといわれてしまった。ヨーロッパでは中国人による産業スパイの事案が散見され、その背後には政府関係機関が関与している、と広く報道されていて、中国への情報流出にはメディア・世論が相当過敏になっているとのことだった。非営利研究所としてはメディア上のイメージは死活問題なので、日本人であるあなたに非がないことは百も承知だが、中国の大学と雇用関係がある以上、データの利用は認められない、との結論だった。

大学行政は非常に官僚のお役所的だ。研究費を使う手続きや出張申請などでとにかく事務負担が大きい。日本の大学も同様だと聞くが良い勝負なのではなかろうか。常勤外国人ファカルティは片手で数えるほどだ。それでも中国の経済学部・研究所の中では国際化が進んでいる方で、中国人しかいない経済学部がまだまだ大多数のようだ。

中国の大学キャンパスは総じて大きい。中国では共産党政権樹立後、長年に渡り、住居は与えられるものであり移動の自由が存在していなかった。従って、大学生になる＝大学に住む、という図式であり、今でも学生のほとんど、かなりの数の教職員がキャンパスに住んでいる。そのためキャンパスには学生寮はもちろん、スーパー、郵便局、銀行、美容院、果ては教職員の子弟向けの幼稚園や小学校もある。キャンパスの雰囲気や建築は、日本と同様、大学によりピンキリだ。暨南大学のメインキャンパスは50年程度という歴史のため中途半端に古くてまったくいけてないのだが、四川大学に行った時はセミナー会場が100年以上の歴史のある優雅な建物で圧倒された。上海科技大のキャンパスはアメリカの著名建築家によってデザインされたモダンなキャンパスだったし、華南農業大学は広大な山林や池に花が咲き誇っていた。深圳にある北京大学のビジネススクールにもセミナーに行ったが、こちらはバブルのにおいのプンプンする贅沢な建築で、教員用のジム、シャワーはおろか、ゴルフの練習設備まであって驚愕した。

政治に関しては迷ったが、本稿では差し控えたい。日々の会話や報道の中で感じる場所がないといえは嘘になるが、大学で経済学の研究者として働いている限り、政治とは縁のない平穏な毎日である。中国の環境問題も日本でしばしば報道されているところであるが、大分改善してきていると感じた。10年ほど前に北京に出張したときは大気汚染がひどく、昼間でも赤く暗い太陽に世界の終末感を抱いたものだが、今回広州に来てみたら、すがすがしい青空の日が連日続いて、街の中心部の川で魚を釣る人が大勢いて驚いた。

中国人との人付き合いも興味深いところだ。日本人と中国人には似ているところと異なるところがある二面性を理解しておくが良い。似ているところとして、体軀・容姿は言うまでもないが、儒教文化を忘れてはいけぬ。家族を大事にして先輩や上司を敬う。友人

も大切にす。大学教授はどこでも大事にしてもらえ。授業では先生のいうことはきく、ということで教育されてきているので、修士の授業でもほとんど質問してこない。成績インセンティブをつけて散々鼓舞してようやくちらほら手を挙げてくれるぐらいだ。

そんな感じで、容姿も儒教文化も似ているので、日本人と同じような言動を期待してしまうが、島国文化と大陸文化という非常に大きな違いがある。中華料理のくんだりでも触れたが、中国というのは全く異なる地域・文化の集合体だ。皆が異なる方言を持ち、文化風習も大きく異なる。異なる母語を持つ人々の意思疎通を可能にしているのが、北京方言をベースに生まれた普通語、いわゆる中国語なのだ。これは、欧米人が英語を共通語にして意思疎通しているのと同じ構図である。そこでは、島国的な付度だとか空気を読むというのは通用しない。都会では日々、違う背景を持つ相手に遭遇するので、言葉で表現して意思疎通するのが基本だ。多様性に対して寛容で包容力があり、お互い言いたいことは言って仲良くなる、という文化だ。研究も行政事務もみんな言いたいことを言い合って、さばさばしたロジックベースでのやりとりになり、このあたりの風通しの良さはシドニー時代と較べて遜色ない。

最後にシカゴ大のJames Heckman教授の言葉を借りてまとめとしたい。今年5月に中国を訪問しIESRでも講演していかれたのだが、レセプションで、中国はまだ変革のまっただ中でさまざまなフィールド実験が行われていてそれを社会実装する機会も非常に多い。新たな国の形ができつつあるところで、経済学者としてとても興味深くやりがいがある、みんな大いに頑張りたい、という事をおっしゃっていて、共感を憶えた。日本の十倍以上の人口を抱え、制度がめまぐるしく変わり至る所カオスであるが、この大きな時代のうねりの中に身を置くという感覚を味わいつつ広州での毎日を過ごしている。

まるやま・しこう 2007年にノースウェスタン大学にてPh.D.(経済学)取得。オーストラリアでの教職を経て、2021年より暨南大学(キナンダイガク, Jinan University)経済社会研究院(IESR)教授。最近の主な論文に“Why Are Women Slimmer Than Men in Developed Countries?”(2018年)。専門は医療・健康経済学、人口経済学を中心とする応用ミクロ経済学。